

Pallet vol. 3



HELLO 対談 & 8392 インタビュー 特集号

HELLO CLUB

Yuji odoi official fan club

YUJI ODOI OFFICIAL FAN CLUB 会報誌 Pallet vol.3

	Yuji Odoi Photos	P01
	HELLO 対談	P08
	8392 インタビュー	P16
	大土井でキャンプでショー！のお知らせ	P34
	INFORMATION	P35

編集長：YUJI ODOI
撮 影：ASAKO NANAMI
編 集・デザイン：HELLO CLUB STAFF

本誌の内容、テキスト、画像等について、著作権は Egg Plan に帰属します。
無断でコピーして配布したり、ホームページやブログ、SNS などに転載し、公衆送信することは固くお断りします。

昭和
平成
そして
令和
こ山から
よろしく!!

2020年
マジ

Q no:















SPECIAL INTERVIEW



「HELLO」で共演した 大土井裕二、菊池真義、増本直樹 3氏にインタビュー。 語られた誕生秘話とは？

<Profile>

【増本直樹】KEYBOARD

1971年生まれ、兵庫県出身。アーティストのプロデュース、楽曲提供、アレンジャーとして活躍。手掛けたアーティストは藤井フミヤ、藤井尚之、タッキー & 翼、中村雅俊、他。キーボードプレイヤーとして、藤井フミヤ、藤井尚之や、puffyのライブサポートも行う。

【菊池真義】GUITAR

1972年生まれ、東京都出身。16歳の時にライブハウスでスカウトされ、19歳で中西圭三のツアーに参加。以降様々なアーティストのツアーやレコーディング、テレビ出演に参加、現在に至る。参加したアーティストは、藤井フミヤ、藤井尚之、平井堅、w-inds、他。



増本直樹 × 大土井裕二 × 菊池真義

----- そもそも「HELLO」のアルバム製作に参加する事になったきっかけは？

裕二 まっすん（増本氏）と呑んでいる時に、「新しいアルバムを作ろうと思っている」って話をしたら「何でも言ってください!」っていうから、何でも言っちゃった（笑）それでまっすんに手伝ってもらいたいってお願いをしたら、「生のドラムってどうでしょう?」っていう提案をされて、「そんなのいけるの?」って聞いたら「いけますよ!」って言うんで、じゃあお願いしようってことになってフクチョー（福長氏）を紹介してもらったんだよね。生のドラムならギターも生がいいよねっていうことになって、ギターなら菊ちゃん（菊池氏）でしょってことになり、今回の四人が集結したと言うわけですよ。

菊池 まっすんに「裕二さんからアルバムの製作に菊ちゃんもぜひってことなんだけど、どう?」って言われたから、「いいよ!」って（笑）。

----- 菊池さんとは尚之さんのツアーのベースリストとしてのライブで一緒だったんですね。

菊池 尚之さんのツアーは 2003 年ぐらいだって言うてました。お客さんが（笑）

裕二 もう 15 年以上も!そんなに経つんだ!

----- 気が合ったというのは、やはり元々知り合いだったというのもあるのでしょうか?

裕二 そうだね。だから物事もスムーズに進んだっていうか。

----- いわゆる「顔を合わせることはないレコーディング」ですね。

裕二 あはは（笑）レコーディングについてはまっすんに話してもらいましょう!

----- 全員それぞれ自宅で撮ったデータを増本さんに集めて作ったのですか?

菊池 特にフクチョーがそうだね。フクチョーが録ったものをまっすんに戻して、裕二さんがベース、ギター、歌…と。

増本 いや、そもそも、裕二さんのギターとラララ〜のやつは仮なんですよ。まず、増本が打ち込みでギター、鍵盤、ドラムに関して全体図のアレンジをし、その音を裕二さんに確認してもらう。裕二さんのオッケーが出たら音と譜面をフクチョーに投げる。それに準じて、まずはフクチョーがドラムを録音する。それに僕が鍵盤を一回弾いてみて、それから「こう

いう感じでいきたいよ」っていうのを、キーボードで表現したり文章で送ったり口頭でしゃべったりして、そのイメージでもう一度フクチョーがドラムを叩いてきたものに対して、もう一回僕が鍵盤弾いたりとか、ベースやギターとかを弾き直しているんです。実は菊ちゃんは僕の家で録ったりしたこともあるんですよ。

菊池 1日3曲くらいのペースで録ったかな?

増本 顔を合わせないでレコーディングする事の短所は、「せーの!」じゃないっていうのはあるけども、長所としては、この超多忙なみなさんが限られたスケジュールの中でやれるというのと、僕が他の仕事している時に誰かがドラムの録音をしていたりとか、僕が仕事が終わって帰ってきたら、データが送られてきていたりとか、逆も然りで。そんな感じで「ささささつ」と早く進むっていう。その速さを比べた時に、菊ちゃんが僕の家に来たほうが早いねってことになって。

----- ここはあーしよう、こうしようというのはディスカッションしたほうが早いっていうことですよ。

菊池 好きにやらせてもらいました（笑）

増本 いや、そうでもないよ。考えてちゃんと…（笑）

菊池 いやもちろん、曲に対するアプローチは好きにやらせてもらいました（笑）指定してあるところは、じゃあ

こうやろうねって。こうしてもいい、こうしてもいいっていう感じではやったかな。

----- そのように録音されたものを裕二さんが聴いて、またベースとか歌を入れ直したんですか?

裕二 曲によってはね。全然そのままでも問題なさそうなのやつはそのまま使ってもらって。俺は俺で全部宅録なので、ベースも歌も自分の家で録って、またそれを入れたモノをまっすんに送って、ハメてもらって、徐々に仕上がっていく感じかな。

菊池 すごいね。

裕二 今っぽいつちゃ今っぽい作り方だね。

増本 それで最終的に僕がミックスし始めていくんですけど、これがまた大変で。

菊池 まあ本職ではないからね。

増本 まあ、好きなのところではあるけども。好きこそもののとはようゆーたもんですね。だからミックスも例えばですよ、今やったらまたちょっと変わるかもしれないね。そんなもんやと思うんです。良いか悪いかは分からないですけど。

菊池 それはそうですね。でもあの時のベストはベストですよ

増本 それは間違いない。

——2017年7月30日に発売になったのは何か理由があったのですか？

裕二 そうだね。7月30日発売だったね。

菊池 あの二子玉の音実劇場のライブの日に発売したんですよね？

裕二 そう。

増本 この日に一緒にライブをやる予定だったので、間に合わせたいねって話になってたんだよね。

裕二 そうそう。音実はこの日でもう押さえてあったからね。そういう意味ではスケジュール通りちゃんと遅れることもなく、おかげさまで順調に全てがうまくいきました。

菊池 いや、増本さんに感謝でしょう。増本さんって呼んだことないけど（笑）。

裕二 上手いことやってくれたね。

菊池 うん。うまいことやってくれた。時間と配分を。僕は弾きだけだから、大変さでは、ぶっちゃけ全然大変じゃない。好きのように弾きだけだから。餅は餅屋やで自分のことをやってるだけだから。だけど他の人はスケジューリングとか、ミックスまで全部含めてやらなあかんかったから、まあ大変だったよね。

----- 一番最初にみなさんで打ち合わせがてら飲んだ時に、スケベ表を組んでましたよね？

増本 ああいうのを考えなあかん立場ですよ。結果、ああいうのを作らなしゃあない。

菊池 作った方が早い。分かりやすい。

増本 みんなもちょっと考えるでしょ？これだけあってって。

菊池 視覚的に分かるからね、これ弾いてないよとか。その前にスケベ表の説明が必要やね（笑）

裕二 なんか違う表に聞こえるからね、スケベ表っていうと（笑）

菊池 スケジュールベースの表でしたっけ？



増本 そう。あれを見ることによって、この人ちゃんと考えているっていう事がわかるからね。「この日までにこれをやってほしい」という説得力が出てくるとい。まあみんな早かったよね。中でも裕二さんが一番レスポンス早かったですよ。

裕二 まあ、何回やってもあんまり変わらないんだよ、俺の場合は（笑）。こんなもんだから、しょうがないからこれをお願いしますっていう。

菊池 そういうやりとりは僕はあんまり知らないんだよね。出来上がったものが裕二さんが録ったものっていう認識。

裕二 なんてったって、宅録だからさ。どうしたっていろいろミックスする上で大変だったところもあると思うんだよね。この辺は今回はもうお任せして。1枚目の「merry-go-round」は全部自分でやったので、それはそれで面白かったけど、その全く逆で、今回はもう任せて任せてって感じだったんで。

増本 ほんまにあの、なんていうのかな…裕二さんって…敬称略でいくと、「大土井裕二」という人と「裕二さん」という人が二人いて、別なイメージがあるんですよ。裕二さん自体がこの人（大土井裕二）を好きにやってっていう感じやから。僕らがアプローチして、「こんなイントロを入れたらどうですか？」みたいなもの、ほぼほぼ OK もらったんで、スムーズに進みました。

菊池 そうね。俺はたぶんやり直してないね。



裕二 だから、こうやって何人かでやる場合、バンドもそうだけど、色んな意見が出るじゃない。それってすごく大事なんだよね。一人だと、一人の頭の中ってやっぱり限界があるしね。何人かでやると、自分では思ってもいないようなアレンジとか降ってくるわけよ。「こういうのどう？」っていうのは「そういうのもあるねえ」ってなるし、それは逆にもし自分が「うーん？」と思っても、「試してみようよ」みたいなものもあるよね。それをやらないと絶対広がっていかないから。どうしてもこうじゃなきゃダメよっていうんだったら全部自分でやれよっていう話だね（笑）。今回やる意味としては、みんなの意見を聞いてみんなに委ねる、逆に言うと使わせてもらうっていう考えでやったから、そういう上では大正解だったよね。

----- アルバム10曲通しで聴いてて、バラエティに富んできますよね。スカもあればレゲエもあってっていう（笑）

菊池 三拍子もあって。

-----3曲ありますね（笑）。

裕二 ちょっと多いよね（笑）。

----- ちょっと話ずれますけど、三拍子が10曲中3曲は多い方なんですか？

菊池 多分多いと思いますよ（笑）

裕二 多いよね。三拍子の曲自体はあんまり…

菊池 一曲あったらいいぐらいじゃないですか。やっぱり裕二さんが好きなんですね。

裕二 本当に何の意識もしてなくて、9曲できてこれでいいやと思って、よくみると3曲あったっていう。それでその後に、一枚目のアルバムもそういえば三拍子あったなと思って数えたら3曲あった（笑）

菊池 やっぱり好きなんですね。

増本 三拍子ツアー。

菊池 『ぞうさん』ではじまるやつ。あのくだりは面白かったですね。（2017年7月30日のMCでも3拍子の曲が多い話になり、3拍子の曲だけでツアーが出来るね！と盛り上がりました）

----- 話を戻しますと、菊池さんがこのチームは完成度が高いって再認識されてらっしゃいました。

増本 裕二さんが極力、手の数でアレンジをするってことで。4人だったら4人の音、とくにギター、キーボードっていうのはオーバーダビングっていうのが出来るので極力減らして。例えば鍵盤で言うと、「エレピを弾いていて次のシーンではオルガンに変わる。プレイヤーがひとりだと、その時エレピは弾けないのでエレピは入ってない」というアレンジ。曲によってはオーバーダビングで同時に鳴っているのもありますが、それは裕二さんに確認をしてもらってるんですよ。僕はエレピを弾いてて、このシーンでBメロになったらオルガンに変えてとかあるんですけど、裕二さんは「この曲エレピ弾ききっていいよ」とか、「あとでオルガンをダビングした感じでいいよ」とか、意外とミュージシャンっぽいていかバンドっぽい会話をしているかもしれないって。曲によってはストリングスとが入ってる曲は割り切ってるし。

菊池 ライブはライブだね。その辺の潔さっていうのはやっぱり、なかなか経験してはる人の判断なんだよね。みんなが。全員が。いるいらない。極力削ぎ落とす。

裕二 やっぱりバンド上がりだと、そういう方に行くよね、だいたいね。やっぱりなんでも一人で打ち込み

できる人はどんどん積んでいっちゃうけど…

菊池 入れたがりますよね。

増本 足し算ね。

裕二 もちろん、それはそれで有りなんだけど、俺の場合はどうしてもバンド上がりなんで、なんかそういうイメージになっちゃうよね。基本的にはね。もちろん曲によってはバリエーションもつけなきゃいけないんで、ここはボンボン入れちゃおうよみたいなものあるけど。トータル的にシンプルな感じがいいかなー、みたいなのは伝えてあったんで、それで考えてもらったっていう。

----- レコ発ライブの時に3人でやって、その1年後にまた3人でツアーに出ましたね。

裕二 そうね。レコ発の頃はできたばかりで、俺も全然慣れてないし、みんなもまだあれだったんで…

菊池 当時は録音した直後だったのでアプローチがCDと近かったと思うんだけど、1年空いて聞かせてもらって、それに寄り添いつつ、またやりたいことを3人でやらせてもらったっていう。それが面白かった。

裕二 そういう意味ではまた進化した感じだったよね。ドラムがいないとかリズムがないと、またアプローチの仕方が変わってくるんで。そこらへんはみんなやっ

ぱりうまいよね。なかなかこうはいかないと思うんだ、普通は。

増本 難しかった。

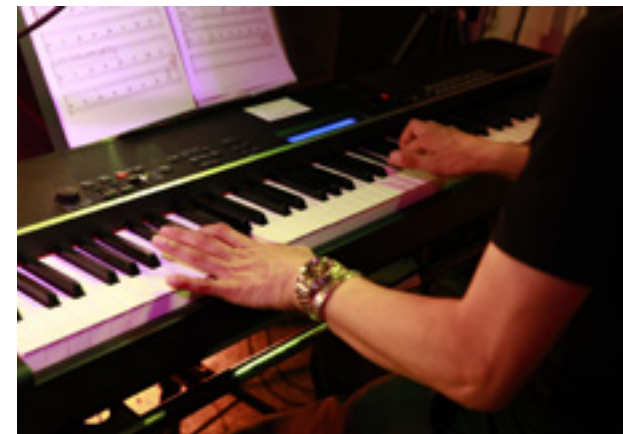
菊池 難しかったね。

裕二 さすがみんな、素晴らしい！

増本 わかりやすく言うと、レコーディングはベースとドラムがいてくれるから出来てた部分があって。例えばキーボードのフレーズとかも、ライブではベースがないので、ベースをどこかで弾いておいてあげないといけない。そうすると、レコーディングと同じことはできないからね。

菊池 左手がふさがるから。

増本 しかも動いてるし。じゃあドラムはどうしよう？ってなった時に、菊ちゃんがドラムの役割を「チャカツク」やってくれてる。じゃあ俺はこうしようって変



わっていく。結局、もうその場の編成でのアレンジになってしまう。

菊池 それが実は三日間とも違ったんですよ。

----- リハの時にその辺の厳密な打ち合わせとかはしてないですもんね。

増本 全然してない。

菊池 裕二さんが好きなようにやって、それに追っていくっていうスタンスで展開しつつ。

増本 裕二さんのギターと歌で、誰がやってもそうだろうけど、出来る事が限られている。そこをしっかりとやって、好きにやってもらって、それで、どうすんねん俺らっていうところの戦いやと思う（笑）。

菊池 ライブ中にパッと始まってみて、裕二さんこ一人でいいや!と思ったら2人とも何もしないとかね。ボーとするわけじゃないけど、どうやって入ろうか



なー？って、パッと空いたら一緒に入ったりするんですよ、キーボードとギターでね。おー、ここで奴は来るんやっ!とかね。それは別に次から入るよっていう合図はしないんですよ。やっぱそうなるよなって。面白かったですよ。

裕二 そうね。やっぱりライブだからね。生ものな感じがね。

菊池 あとはソロをどっちが弾くか?みたいなね。

増本 毎回あるね。

----- どうぞ、どうぞっていう感じですか？

菊池 それで入るのを忘れるっていう（笑）毎回どっちでもいいよっていうスタンス。

増本 俺が弾くぞって言うときに、菊ちゃんが「俺が弾くわ!」って言うてるような感じもあれば、俺が弾いてって目で言うとのに、全然弾かんときもある（笑）。あーそうかって。そういうのもライブだもんね。

菊池 お客さんにはあんまりわからないとは思うんだけどね、意外と。

裕二 まあまあそうだね。

菊池 どっちがソロを弾かなきゃいけないとかは、あ、俺か?とかなってるのはお客さんには気づかれていないと思う（笑）。

----- ツアーの初日のMCでソロどっちがやるのか?っていうくだりがありましたよね？

菊池 合図がないとか、その辺の自由さ。裕二さんの「好きにやっていいよ」っていうのがあるから。

裕二 そういうのが面白いよね。何が出てくるのかが。

----- お客様も三日間こられた方もいましたしね。三日間の感想として全然、違うものだっていう。

菊池 そう、だからみんなライブは全部来た方がい





いですよ！

裕二 毎回違うからね。全然曲も違うし！とかいって（一同爆笑）

菊池&増本 そんな嘘ついて！

裕二 そんなわけはないけど（笑）

菊池 なんなら俺歌うし（笑）

裕二 まっすん踊ってるし！

（一同爆笑）

菊池 腹踊りね

裕二 実は曲順は 1 日目と 2 日目は変わってたんだよね。

菊池 カバーは毎回変わってましたね。

裕二 そうね。

菊池 そのうちカバーにも付き合うようになったりして。

裕二 それこそ何が出るかわからない。

菊池 始まったものに無理やりついていく（笑）

裕二 セッションみたいな感じ。

増本 「M-3」なんかは特に、何も決めてない。

裕二 あそこまで変わったっていうのはないよね。ああいうのが入るとヘソになる感じがある。普段聴いているのと感じが違って、いつも来てる人も「おおー」ってなるもんね。

菊池 すぐく言われましたよね。M-3 が良かったって。

実は M-3 の原曲を知らなかったので好き勝手やらせてもらいました。知ってたら似通っちゃいますからね。

裕二 意外とそうだね。意識しないでもいいよっていわれても、聴いちゃうとそっちによっちゃうからね。聴かない方がいいよ。そういう時は。

菊池 弾き語りだけいただいて。ただ、その時点でもすでに違うじゃないですか。

裕二 まあ、そう、あの時点で違うのは違うんだけど…

菊池 そっちに寄せちゃったというか、それに引っ張られたというか。

裕二 もともと16ビートでやってたのを、俺一人で行くときは8系のアップーな感じでやってたので、それをこんど菊ちゃんが8の渋い重いロックに持っていって感じだね。こういって、こういって、こういったみたいなさ。

菊池 ちょっと遠回りでしたけどね。

裕二 面白かったよね。同じ曲でアレンジが変わるとこうも変わるかっていうのもまた面白いし。ライブならではだよ。

----- 次はいつなのかってお客様からは言われますが、その辺は企画できたら嬉しいですね。

裕二 ね、どうしようね（笑）また年に一回ぐらいは一緒にやりたいよね。





Yuji Odoi
Self Cover Album

Compositions '83-'92

全曲インタビュー ～前編～

「Compositions '83-'92」
大土井裕二
Egg Plan Records /EPCD-004

2019年11月2日リリース。チェッカーズ時代の自作曲をセルフカバー。歌唱、演奏、アレンジ等すべて大土井1人で行った渾身の作品。通常版とフォトブック付の豪華版の2種類をHELLO CLUB SHOP 及びライブ会場にて販売中。

— ついに「Compositions '83-'92」が完成しました！まずはカバーアルバムを作ろうかなと思ったきっかけについて教えてください。

もともとライブではやっていたので、「HELLO」を作る時に、チェッカーズ時代のカバー曲も入れたらどうかという話もあったんだよね。でも、1曲2曲入れるのも中途半端だし、やるならそれだけでカバーアルバムの方がいいんじゃないかなと思って、HELLOの次はそういうのがいいんじゃないかな、ということでやってみました。

— たしか、2018年1月の、新宿カールモールのライブ時に「よし、やろう！」って決まった記憶があります。発売の日程もその時に決めて、そこからスタートしましたよね。構想から考えると約2年、決まってからは1年半で作り始めたということになりますね。

ほぼほぼ予定通りだったね。2019年の年明けの頃に、なんだかんだやり始めて。

— でも、やっぱりバタバタしましたね（笑）

意外と最終的にはタイトな感じだったけど、まあでも一応予定どおりかな。今の所大きなトラブルもなく。（※取材時はまだCD完成前の10月中旬でした）途中でMACが調子悪くなったりして焦ったけど（笑）

— レコーディングはいつから始めましたか？

レコーディング自体は夏ぐらいからじゃないかな？音を録り始めたのはね。

— 先に音から録りはじめたと思うんですけど、全体的なアレンジをどうしよう、こうしようというのは、ライブで演奏している時から頭にあったんですか？

曲によってはね。ある程度、この曲はこんな感じだっていうイメージはあったので、それに沿って録音していった感じかな？ただまだアレンジが決まっていなかった曲ももちろんあったんで、それはやりながら、もう思いつ

大土井裕二の57歳の誕生日にしてソロデビュー7周年記念日の2019年11月2日に満を持してリリースされたアルバムの全曲インタビューを敢行！今回は前編として前半5曲の制作秘話をお届けします！

きだよ。その瞬間に思いついた感じでやっていく。

初に決めた曲順で最後までいけたので、それはそれで良かったかなと。

— それがやっぱりユウジさんのセンスなんでしょうね。カバーアルバムを作ろうと思ってから2年くらいの間、なんとなくざっくりとしたアレンジのイメージというのはご自身で持ってた？

— 1曲目が「あの娘とマッシュポテト」というのは最初から決めてました？

これはもう、これしかならうなと。

そうね。アルバムに収録する曲を10曲に絞った時点で、曲順も決めたので。

— 自作曲の中では一番最初に作った曲ですかね。

— それはいつごろですか？

曲出しをしたのは去年（2018年）だったと思う。

— この10曲に絞った経緯というか、全20曲ある中ですぐに選べました？

意外とね。消去法じゃないけど、選んでいくうちにこの10曲で決まりかなっていうのはできたかな、すぐ。曲順については最後までどうするかわからないというのはスタッフみんなに言ってたけどね。アレンジによっては曲順を変えた方がいいかもっていうのがあるかなとは思ってたけど、それもなく、最



内海さんのラジオ番組でプロモーション！

そう。时期的なものと、曲の明るさと、いきなり暗い曲から始まるのもどうかなっていうのもあるので、そういう意味では逆にあれは途中に入れたらちょっと難しいかな、もう頭しかないなと。あの能天気な感じは（笑）

—では曲順にお話を聞かせてください。

★ 01. あの娘とマッシュポテト

オレよりもみんなの方が 思い入れがあるんじゃないかな？

—これはアマチュア時代に作った曲だと思いますが、正確にいつ頃作った曲か覚えていますか？

いや、正確には覚えてないけど、チェッカーズに入ってから、チェッカーズでやるために作った曲だと思うんで、大学生のころかな？ 18歳か19歳の時に作った曲だと思う。これと「ガチョウの物語」は。

—当時のチェッカーズとしてはすごく合ってるのかなと思います。

そうだね。ポップなドゥーワップ的な。

—オリジナルのチェッカーズの曲はベースから始まってますが、それはあのメロディーからできてきたのですか？

あのフレーズね（笑）あのフレーズはね、ベースから始まるよっていう話になったのかな？そしてあのフレーズをつけたのかな、オレが。曲中で弾いてるフレーズを変えたくらいなんで、基本的には曲中でもあんな感じで弾いてるの。

—すごくベースが印象的な曲だなという感じがします。

ベースから入ろうっていうアレンジでそうなったと思う。

—この曲はアマチュア時代にレコーディングはしましたか？

いや、してないんじゃないかな？覚えてないけど（笑）デモ的なものは録ったのかもしれないけど、あんまり記憶にないね。

——「涙のリクエスト」のB面に収録されてますけど、その選曲というのは？

それはやっぱり、レコード会社の人間とかと話して、こうしようああしようと。B面に関しては最初からオリジナルでやってたんで、その時にあるオリジナルをみんなで聴いて、これがいいんじゃないってことになったんじゃないかな？



PARIS MIKI 渋谷店にてリリースイベント！

—あのシングルは、ブレイクのきっかけのシングルですもんね。そのB面の曲ということもあって、ユウジさんにとっても思い入れの強い曲だと思いますけど。

オレというよりは、ファンの子の方がそういう気持ちで聴いてたと思うんだよね。思い入れ的にはみんなの方があるんじゃないかな？オレ的にはむしろ、「あれ？アルバムの曲じゃなかったっけ？」って感じだったし。

—おそらく、多くのファンの女の子たちが、一番最初買ったレコードが涙のリクエストだったんじゃないかなと思うんですが。

そうだね。そのB面だから、結構みんなの反応がいいよね、あの曲自体に。懐かしいって。

—私はまだ11歳、小学校5年生でした（笑）

おー、そうだよ（笑）

—そんな子供の頃に聴いた曲が、十分すぎるほど大人になった今、こういう風に蘇ってくるって思うと、やっぱりファンの人も感慨深いですね。

そうだね。やっぱりアレンジ的な部分についても、今回いろんな意味で昔の曲のアレンジをどうしようかっていうのを、一応色々考えるわけで。やっぱり、カバーというのはオリジナルには勝てないので、いろんなアレンジを加えても、結局オリジナルがいいよねってなっちゃうんだよね。その時代に聴いてるからね。あえてそこを同じような感じにするパターンと、ガラっとかえるパターンとで、全体的にはバランスを取ったんだけど。マッシュポテトに関して、追っかけのコーラスとかをどうしようか考えたんだけど、そこまでやっちゃうとちょっとこれだったらオリジナルのがいいよねっていうことになりかねな

Compositions '83-'92

全曲インタビュー ～前編～

いので、あそこはギターでいこうかなとか。あとはリズム的にも、もともとあんなに跳ねてないんだけど、曲調的には可愛い曲なんで、今はああいう風に跳ねた感じに、「トゥックチャッカトゥックチャッカ」ってなっているけど、元々は「ドドストスタタタタタトウー」だから、全然跳ねてないんだよね。だから跳ねた方が可愛いかなと。そういうところでちょっと差別化を出して。まあオレが歌った時点で違う曲の感じにはなっちゃうんだけど。

—それがまたいいところだと思います。

そうそう。同じ人のセルフカバーとはちょっと違う感じになってるよね。



PARIS MIKI 澤田社長とセッション！

—同じ人のセルフカバーだと、単なるアレンジ違いになってしまうけど、それがまったく別物になるというのはすごく良いと思います。イントロからしてまったく違うものになっていますが、そのイントロはどのように決めましたか？

オリジナルの「マッシュマッシュ」っていう追っかけコーラスの部分をギターでやるんで、イントロもギターでそのまま行ったらいいなと思って。あれはホントに思いつきで、その場で考えて、ギターをハモらせたのかな？

—いきなりギターで入ってくところが、今のユウジさんっぽいと思います。

うんうん。

—オリジナルはベースから入る、ベースが印象的な曲なのに、ベーシストのユウジさんが歌う曲がいきなりギターから入るっていう、そのいきなりのインパクトがスゴいですよね。

その方が面白いかなと思って（笑）

—すごく面白いと思いました。

あの曲は、実はベース自体も、普通のベースじゃなくて、ちっちゃいゴム弦のベースを持ってるのよ、ウクレレベース。あれを使ってるんだよね。音がポコポコする感じで。ギターもライブで弾いてるのは違って、ナイロン弦のアコギでやってるので。キャンプの時に弾いてるあのギターで弾いてるんだよね。

—へえー！あの小さいの？

そうそうそう。エレキは普通にエレキだけど。あと、パーカッションとかは、ウチにあるおもちゃのボンゴみたいなやつをたたいたり、タンバリンとか自分でジャカジャカやったりとかね。そういうアコースティック感を出したアレンジにしようと思ってたんだよね。全体的にアコースティックで跳ねてて可愛い感じに。一応そういうイメージどおりのアレンジにはなったかなと。

—歌詞がとてもかわいい歌詞じゃないですか。年齢的に合わない歌詞でありつつも、そういう歌詞に対する思いというか、考えながらアレンジしましたか？

実は歌詞については何の違和感もなくて（笑）ずっとあの歌詞でやってきたから。



京都では着物でうイッ！

—歌詞からくるイメージでアレンジに入ると言うんですけど、歌詞があまりにもなじみすぎて、あんまり考えなかったってことでしょうか。

うん、そうだね。あんまり意識しなかったというか。基本的にイメージの方向性は変わらないので。昔のアレンジよりもより歌詞のイメージに近いのになっていう感じかな？

—たしかに、今はマッシュポテトは食べに行かないし、目覚めの朝にホットミルク飲まないし、横目であの子を見て、ハートがドキドキ100℃になったりしないですよ（笑）

最近はいわえタバコも怒られるからね。禁煙のお店が多いし（笑）オレもタバコ吸わないしね。

—そういう頃から比べると、昔を彷彿とさせつつ、今の感じが出ていてすごく良いなと思います。

トータル的にはアコースティックが柱にあるので、アコースティック + α のアレンジという感じでね、全体的にね。

—それでもコーラスはかぶせていますよね。

追っかけのかわりにハモリを入れようと。ひとりでやるようになって、メロハモかぶせるっていうか、後ろでメロハモつけるっていうパターンは結構アリかなと思って。別のフレーズを入れるよりも、C メロの後ろでハモった声が入ってるのがちょうどいいくらいになってというのが。もとは A メロをハモってるんだけど、そこでまた前のアレンジとの差別化みたいな。ハモってるんだけど、違うところでハモってるみたいな。



素敵なバースデーケーキ in 京都

—ソロライブを始めた当初にマッシュポテトをやってた頃とは、ライブでも途中から違うアレンジになりましたよね。いつからか今回のアルバムのパターンに変わったと思うのですが、カバーアルバムを意識してライブでやるようになった

Compositions '83-'92

全曲インタビュー ～前編～

のか、ライブでやるようになったからアルバムのアレンジに採用したのか、どちらですか？

たぶん、アルバムをイメージして変わったんだと思う。アルバムに入れるにあたり、マッシュポテトをどういう風にやろうかなって考えてる時に、ちょっと跳ねてやったら「ああ、可愛いな」って思っ。それからライブでもそういう風にやってると思う。

—その頃からアルバムを意識して、ライブでも若干変わってきたってことですね。

そうそう。

★ 02. Purple Morning

オリジナルは聴きなおしていません（笑）

—これもホントにガラッと変わってますね。

そうだね。これも多分、あの頃のアレンジとは全然違うよね。といっても、あの頃のアレンジはあんまり聴いてないんだけど。

—聴かずにやったんですね。

全曲そうだけど、聴きなおすことはしてないの。だから、テンポ感とかアレンジとかは、覚えてるのはもちろんあるけれども、改めて聴きなおしたりはしてないんで、だから歌い方とかは若干違ったりするのよ、詞の乗せ方とか。そこはあまり意識してないけど、詞を変えてはいけけないので、ハメ方がちょっと変わったりとか。そういうことも含めて、今の

ライブでやってるものに近い状態で。「Purple Morning」もそうだけど、アレンジ自体も今ライブでやってる感じに肉付けをしたっていう。特にこの曲は構成も違うしね、間奏もないし。弾き語りの場合、間奏があってもなくてもっていうところがあるので、間奏だからソロが来ないといけないう感じでもなかったりもするし、そういうのを含めてもっと自由な感じでね。

—こんなこと言ったらなんですけど、私はチェッカーズの曲よりもこの「Purple Morning」の方がすごく好きなんです（笑）

自然かもしれないね、多分。

—自然だし、歌詞の世界がすごく入ってきます。「あ、この曲ってこんなにいい曲だったんだ」っていうことに今さら気付いたような（笑）

リズムについては全体的にそうなんだけど、8ビートで普通にフォークっぽい感じでやってるじゃん？もともとそういう風に作ってるんだよね、ギターで作った時に。この曲は絶対そうだと思うんだけど。

—だから自然に聞こえるんですね。

作った時はこのパターンだったからね。で、当時はアレンジしてる段階で16ビートに変えたりとか、ちょっと忙しくなっちゃたりとか、バンドでやる上では当時の流行りっていうのもあったんで。だから、そういう意味ではこの曲は多分、今回のパターンがいちばん最初に作った時に近いはずだね。

—なるほど！チェッカーズの頃から、その歌詞の状況をイメージして聴くことが多かったのですが、その主人公は歌っている人というか声の持ち主だから、だいたいフミヤさんのイメージで、こんな情景なんだろうなって

うのを頭の中で描いていたんです。でもこれはマサハルさんが歌っているの、マサハルさんの雰囲気的に、なんとなくイメージしづらかった曲だったんですね。

そうだね。マサハルはだいたいこういう詞の内容の曲を歌うタイプではないからそういうイメージもないし、今思えばあんまりハマってはなかったのかもしれないね、当時は。



—それがユウジさんになった途端に、あ、こんな曲だったんだ、こういう感じの曲だったんだってっていうのを感じて、すごく切なくなってしまっ

もう大人だからね（笑）

—ユウジさん、ひとりになっちゃたけど大丈夫なの？なんで追いつけないの！って（笑）

あはは（笑）ほんとだね。でもそういう詞だもんね。それはそれで正解だったのかなと。

—それで劇的に生まれ変わった感じがしました。

なるほどね。

—何回も何回も繰り返して聴きたいので、相当リピートしてます（笑）

よかったよかった（笑）イメージ通りにそれが伝わっていれば、それはやった甲斐があったよ（笑）

—ホントに、「Purple Morning」っていうだけあって、紫色の朝のイメージで、バスに乗っていった彼女のことを思う自分の心も紫色になっちゃったみたい。まさにフォトブックの写真のイメージで。

うん、まさにそういうイメージ。そういう雰囲気が伝わればいいなと。

—なんとなく、ユウジさんのイメージ的に、失恋の曲っていうのが（「I Love you, SAYONARA」は別として）なかったような感じがして。その登場人物に対する思いついてありますか？自分もこんなことがあったとか。

まあ、一応それなりに年を喰ってるので（笑）そういう経験もなきにしもあらずですけど。オレは結構、去る者は追わずタイプだからさ。

—そうなんですね！

そういう風に見えない？

—…はい、見えます（笑）

そう、絶対そうなんだよね（笑）

—去られちゃったこともあるってことですね（笑）

うーん、そうだね。そんな状況はやっぱり

Compositions '83-'92

全曲インタビュー ～前編～

あったよね（笑）

—チェッカーズの当時にこの曲にこの歌詞が乗って、自分の中で印象がかわりました？

あのね、ピッタリっちゃピッタリなんだよね。メジャーとマイナーで展開してるので、そこをうまいこと、なんていうんだろうな、ハマり的には、詞の内容的にはいい感じだったと思いますよ、当時から。ただ、アレンジに無理があった感じは当時からあったよね。

「いなたい」感じで、「シンプル&リアル」がコンセプト！

—トータル的なアレンジのイニシアチブをとってるのは、基本的にトオルさんですか？

うんとね、基本的にはみんなでわーわー言いながらやるんだけど、作った人間が先頭に立って、アイデアとしては、もちろんトオル



とかナオユキとかカンペーちゃんとか、みんなのアイデアを試して今回こういう感じにしようって決めていくので、この曲自体がどうだったのかはオレも覚えてないけど。まさにバンドのアレンジって言う感じで。今回、16 ビートのアレンジを 8 ビートに戻したことで、原点回帰した「いなたい」感じになったと思う。今回は全体的に「いなたく」したんだよね。アレンジ的にも楽器的にもミックス的にも。シンプルでリアルな感じにしたかったなと。「シンプル&リアル」というのがコンセプト。それぞれ楽器とか声とかが結構生々しく聴こえる感じに仕上げたかった。

※「いなたい」とは、音楽的に「泥臭い」「ブルージー」「素朴だけどカッコイイ」といった意味。

—「Purple Morning」の中のアレンジで印象的なのが、サビ前に 1 回止まるでしょ。あれがすごくいいなと。

あのあと、マイナーからメジャーにいくでしょ。シャラーンって場面がかわる感じがする。それが多分上手くいってるんだと思う。

—このアレンジは、ライブとはちょっと違う気がするんですけど、それは他の楽器が入ってくるからですか？

多分、アコギ自体はライブと同じ。ただアコギ 1 本でやると、マイナーからメジャーに変わるところが極端になるから、ドラムが入ることによって、バンドの感じで展開してるんだけど、まったくの弾き語りとは違うよね。

—それがすごく新鮮でした。本当に歌詞がスッと入ってくるアレンジとユウジさんの歌声で。これは新しい発見につながったような感じはしました。マッシュポテトの次にこれが来ることによって、「おお！」って感じが

(笑)

曲順的にはこれがすごくよかったかなと。流れがね。



— ポップな感じから大人な感じに引き込まれるというか。その年齢の振り幅が、チェッカーズ時代から今までの長い時間の流れを感じられるところがあってすごく良かったと思います。歌っているときは、歌詞の心情などを深く考えながらレコーディングしましたか？

一応ね、考えるんだけど、深く考えてるかっていったらそうでもないんだけど。やっぱり CD にする上ではちゃんと歌わないとなってしまうので、むしろライブの方が感情が入るかもね。

—ライブでは歌詞の感情を入れながらリアルに出してる感じですか？

多分、その方がやりやすいよね。

—淡々と歌ってるイメージの曲もあるんですが、ちゃんと歌詞のことを考えて思いを込めて歌ってるんですね。

一応ね、そうだよ。

—もちろん、感情を込めてるのもあると思うのですが、淡々と歌ってるのもユウジさんらしいなと思う曲もあって。たとえば、「Purple Morning」の去ってしまう女性を、誰かって思い浮かべたりしますか？

いや、誰かってことはないかな。

—誰かというより、架空の自分の中でイメージする人がいたりとか？

意外とね、この曲に関しては、第三者的に見てるイメージがあるかもね。そういう男と女のドラマを客観的に引きの画で見てる、そんなイメージはあったかもしれないね。

—自分のイメージじゃないんだ！私もそんなイメージを感じていて、ドラマとして見てる感じがあって、その女性になりたいというのではなく、客観的なドラマとして見ていたかもしれません。

★ 03.Black Lion

やっぱりレゲエがハマったんだよね、この曲は。

—この曲も全然アレンジが違いますよね。「Black Lion」は、大土井でショー！の初期の頃は、ライヴではやっていなかったと思います。最初は、フミヤさんのボーカル曲以外は歌っていませんでしたよね。2～3 年経ってから歌い始めたような記憶があります。

そうかもね。「Black Lion」よりも先に「Yellow Cab」を歌ってたと思う。

Compositions '83-'92

全曲インタビュー ～前編～

—「Yellow Cab」歌うまで、タカモクさんが歌った曲を歌っていなかったけど、「それもあるよね、それもいいよね」って言ってたのを覚えています。

ミニサミで自曲を毎月やるのに、やる曲がなくなってきた、フミヤが歌った曲以外も歌っていいよねって思ってたようになってたのかも。そこから自分で作った曲は全部やろうってことになった。

—ユウジさんは、タカモクさんが歌った曲を 3 曲も作ってたんだって改めて気づきました(笑) ユウジさんの曲のイメージとタカモクさんの歌い方がチェッカーズの中でマッチしたのかなと、ワイルドで男っぽい感じが。

そうだね。ロックンロール的なのが多かったから、そういう意味では結構合ってたのかもしれないね。

—タカモクさんが歌う曲って、アレンジがものすごくカッコイイっていうイメージがありますが。

そうだね。やっぱりホントにロックンロールだからね。

—「Black Lion」は、歌詞の内容的には、「もう大人になったから、そんなこともあまりないだろう」という感じで大人なアレンジになったと思うんですけど、この曲は最初のルフがエレキですよね。しかもレゲエで。

そうだね、レゲエにしちゃいましたって感じなんだけど(笑)

—あの曲がレゲエになるんだ！って、驚きました。

Compositions '83-'92

全曲インタビュー ～前編～

この年齢であんなことしたらただの犯罪者ですから（笑）その古っぼさが、ちょっとセピア色になったような感じというか、歌詞カードのようなモノクロな感じというか、そういう雰囲気が出てるかなと思います。

うん、そうだと思います。ベースのパターンも全然違うしね。今回のアルバムでは当時のパターンを使ったものはないんじゃないかな。まあ、覚えてないってものあるんだけど（笑）

—先ほどもタカモクさんが歌った曲の話が出ましたが、「Yello Cab」「Gold Rush」「Black Lion」という3曲の中で、今回のアルバムに「Black Lion」が選ばれた理由は何ですか？



さあ、どっちに行こうかな？

んな感じだからね。レゲエにするともっとフワっとボソボソっと言える感じがするよね。そういう大人感を出したかったんだよね。詞の内容的なものも含めて。

—こういう歌詞の経験はないですか（笑）

そういうのはないな。うん、ないね（笑）

—多分この曲はフミヤさんもタカモクさんに当て書きしたんじゃないかと思うんですね。フミヤさんのイメージでもないの。

そうそう、そうだよな。

—あの歌詞を今の年齢に持ってくるに当たり、レゲエっていうのが生きてくるのかなって。

そのとおりです。この年齢でこうして歌うにあたり、アレンジ的にはこの曲にはこれだろうっていうのがハマリだと思う。

—歌に入ると途端にユウジさんらしが出てきますよね。やっぱりレゲエのイメージがすごくあるんですよ。「Rainbow Station」や「Thank you very much!!」もレゲエですしね。

そうだよな。今までレゲエの曲はたくさん作っているんで。

—他のメンバーの作曲で、レゲエのアレンジってほとんどないですよな。

そうだったかな？今回も特に、レゲエのアレンジの中でも「いなたい」感じがするっていうか、ちょっとこう古いレゲエな、今っぽくない感じがするよね。

—その古っぼい感じが、この歌詞の内容的に、今起こっていることなのか、過去のことなのかを考えさせられますよね。だって今の

キョワ〜ンっていうイメージがユウジさんには一切ないですよな（笑）

あれはチョーキングなんだよね、上からキョ〜ンって。まあそうだよな、エレキはなかなか弾かないからね（笑）



今日はいい天気だね！

—そのエレキギターのチョーキングがユウジさんのイメージではないにもかかわらず、レゲエなんでやっぱりユウジさんだなんていう、ミスマッチとマッチがうまく融合したなっていうのと、歌い方が他の曲とは違うのかなっていう印象があります。

けっこう音域の幅があるので、特に頭はちょっと低いんだよね。だからかなりオンマイク（※ボーカリストや楽器のすぐ近くにマイクをセットすること）で歌ってるんだよね。けっこう近づいてる感じ？

—なんと言うか、ささやく感じが、タカモクさんの歌い方とは全然違って。ユウジさんはちょっと引いて「あの娘には二度と近づくなよ」と大人っぽく言ってるのに対して、タカモクさんバージョンは「オマエ、あの娘に二度と近づくんじゃねーよこの野郎！」っていう若さとパワーを感じますよね（笑）

最初から勢いがね（笑）アレンジからしてそ

それが面白いよね。ホントに当時はダンスナンバーだったんで。「ギャー、ギャー、ドンチキドンチキドンチキドンチキ」って。それが「ンツキヤ、ンツキヤ、キョイ〜ン」ってね（笑）この落差が面白いんじゃないかと。

—これも、ユウジさんが当初ライブでやっていたアレンジとちょっと変えてきてますよね。最初はここまでレゲエじゃなかったと思いますが。

そうかな。よく覚えてないけど（笑）いつからかレゲエになっちゃったんだよね。

—そうなんです。それがまたユウジさんらしくもあり。

やっぱりレゲエがハマったんだよね、この曲は。ライブでやりながらそうなっていった曲ではあるんだけど。だから今回これは完璧にちゃんとレゲエっぽくしようというコンセプトでアレンジをしたので、もうドラムはレゲエのパターンだし、アコギで裏をずっととってて、エレキでちょっと違うリズムでちょっとエフェクトかけたりしてて。ギターがずっと後ろでチョコチョコやってんじゃん？あれも一発なのね、ほぼ。雰囲気で頭を弾いて、それを流しっぱなしで弾いてて、どういう感じにしようかって思いながらずっと弾いてて。聴いてみたら「これでいいか」って（笑）整理してもいいんだけど、タラタラずっと弾いてても大丈夫そうだなって思って。

—最初のイントロも思いつきですか？

うん、そう。あのフレーズはすごく気に入ってて。「キョ〜ン」って入ってくる感じが、「あー、大人な感じがするな」って。

—そうなんですよな。そしてそれがユウジさんっぽくないんです（笑）エレキギターで

やっぱりアレンジ的なところで、いちばん面白いなと思って。これだけ変わったのと、やっぱり、この年になって歌うならこの曲がいいなと。イントロもギターから始まってね。あのギターはオレも自分で弾いて「あ、いいなこれ、なかなかいいんじゃない？」って、オシャレな感じだなと。

★ 04. サ・ヨ・ウ・ナ・ラ

そうそう、ちょっと 安心する感じがね（笑）

—この曲はそんなにアレンジも変わってないですね。

そう、ほぼ一緒です。ただ、楽器的なものが違うだけで。

—これはもう、「ザ・大土井裕二」っていう。

もうね、これは三拍子以外に考えられないのと、アレンジもこれ以外にはないという。

—これは、確実に完成された、大土井裕二の王道というか、もともとチェッカーズの頃から、チェッカーズの曲というよりも、大土井裕二感しかなかったというか、あまり他のメンバーの顔が出て来ない曲だったんですよね。

そうだね。そういう意味では、他のアレンジ考えてなかったし、このパターンで普通に録ってみたらこれでいいかなって。

—そうなんです。これを変えてくれなくて良かったなっていう。

あはは。むしろね（笑）

—安心したというか、「やっぱりそうだよね、これはこうじゃなくちゃね」て。

そうなんだよ、そろそろこの辺でちゃんと昔のイメージがリンクするものを置いておかないとね。

—そうなんです、ここで当時の雰囲気に戻ってきたんです！前の3曲がここまで変わってきたのに、「サ・ヨ・ウ・ナ・ラ」で戻ってきた！ってやっぱりそうだよね！って。

そうそう、ちょっと安心する感じがね（笑）だから、曲順では見事にハマったなと。

—この歌詞も、今の時代に合っているというか。

この曲については書くことがないくらいに。もう、聴いてもらったとおりです、みたいな（笑）



風が気持ちいいよね！

—入ってないのが間奏のナオユキさんのメロディーのパート、あれをギターのジャカジャカだけで表現してて、メロディーが脳内補完されるというか、自分の中でナオユキさんのパートが発生する感じがします。

あの曲は間奏もあえて何も入れてないんだよね、リフを。コード展開だけで。弾き語りの時はソロって弾けないので、基本的にコード回しだけで。あの間奏はコード進行ってというのがすごく完成されてるので、あれだけで全然持つなって思ったんだよね。あれは多分カンペーちゃんが考えたんだよ。あれは素晴らしいよね。

—そのコード進行がすごく生きていますよね。

そうだね。メロディーが入ってないから、当時の音が聴こえたり、また新しいメロディーが聴こえたりするのもかもしれないね。そのあたりは聴いている人のイメージで良いと思います。

—間奏のメロディーの、音階が上がってくる感じが、コード進行を聴いてるだけで自分の中に流れてくるんですよね、基本的な楽器のアレンジも雰囲気も似ているので。これはチェッカーズを聴きこんでいたからこそ、脳内で自分も参加しちゃっている感じがするんです。

これも、アレンジとかミックスをすごくリアルにしてあって、声ってまったくノーリバーブで、この辺で（ユウジさんの顔から15cmくらい前の所に手を置いて）歌ってるみたいな感じで聴こえたらいいなと思って。結構ね、ヘッドホンとかで聴いてもらうともう、この辺で歌ってる感じがするっていう（笑）そういうところも含めて、何かリアルな感じを出したかった。

—ヘッドフォンで聴くと、頭の上の方で聴こ

Compositions '83-'92

全曲インタビュー ～前編～

えるじゃないですか。でも「サ・ヨ・ウ・ナ・ラ」に関しては、ダイレクトに自分の真ん中から来るなって。

結構近くにいる感じがするでしょ。

—この曲はチャカチャカ鳴るものが入ってますが、何を使いましたか？

「シャッシャ」ってやつね。あれはね、パーカッショングッズで、植物が枯れたようなものがいっぱい繋がってるものがあって、なんていう楽器かまったくわからないんだけど、昔アンディさんにもらったのかな？「カシャッカシャ」っていうんだけど、それをね、リズムに合わせて「シャッシャ」って。鳴り物的にはそれくらいかな？あとはアルペジオをナイロン弦のギターでずーっとやってるのと、普段ライブの時に弾いてるストロークと、ベースと。

—今回はベースは何を使ってるんですか？

全部ジャズベだね。あ、1曲目（あの娘とマッシュポテト）だけはウクレレベースだね。

—他の楽器が入らなくても、それだけでアレンジが完成されていますよね。コード進行が素晴らしいので。

あとはドラムとコーラスだね。

—コーラスはハモリでかぶせてある？

そうだね。

★ 05.Love '91

元々はモロに
ロックンロールだった！

—これも「戻ってきた！」感がありますよね。

そうそうそう。これこそ、ホントに作った時のイメージでやってみました的な感じで。ライブでも言ったけど、打ち込みが流行ってた時期で、打ち込みにしたら面白いんじゃないかってことで打ち込みにしたんだけど、あれはあれでももちろんいいんだけど、多分元々は、今回のバージョン的なそういうドゥーワップ的な、50年代60年代のロックンロール的な、モロそんな感じの。だから普通にアレンジすると、ああなるんじゃないかなみたいな。コーラスも入れてるけど、シンプルにもうウーとかアーしか言ってない的な。

これも「いなたい」感じで！

—もう、山下達郎ばりのコーラスワークですよ。初めて聴いた時に、わーヤマタツっぽいなって思いました（笑）

いやいや、そんな大したものじゃないよ（笑）でも、オーソドックスな感じになるよね。だからホントにこれも「いなたい」感じで。

—当時もドゥーワップ的なコーラスが入っていて。これはチェッカーズの時とはベースラインが全然違いますよね。

そうだね。打ち込みだから、オレが弾いたフレーズを全部シンベ（※シンセベース）とかでやり直してもらって。ドラムとかもそうだ

し、打ち込みだから。けっこうそういう打ち込みの中で生音も若干入ったりしてて、基本打ち込みメインで作った曲だよね。

—この曲はチェッカーズのライブではやってないと思うんですけど。

ああ、そうね。どうだったかな、覚えてないけど（笑）

—歌番組では結構やってるんですよ。フミヤさんがガイコツマイクを使っている。

でもね、打ち込みだったから、カラオケとかでやるならいいけど、生演奏でやるのは結構大変だったと思うんだよね。

—多分、生演奏ではあんまりやっていなかったと思います。ほとんど当て振りだったような気がする（笑）

そうかもしれないね（笑）

—打ち込みだって当時から言ってたんで、だからライブではやらなかったのかもしれないですね。

そうだね、もうイメージが変わっちゃうからね。まあでも、当時の流行りでそういう風になってただけ。



牛の頭を撫でるとご利益加！

—当時は、打ち込みにあのコーラスワークが入っていて、すごく斬新だったイメージがあります。

そうだね。こういう曲だからこそ、打ち込みをするのが面白いんじゃないっていう。

—それが元に戻ってきたって感じなんですよね。今回のベースラインも、流れるような感じですごく自然なんですけど。

そうそう、ものすごく王道のドゥーワップ的なベースにしてると思います。

—これはもう、最初からイメージ的にはこういう感じでって思っていました？

うんうん、この曲はもうそうしようって。コーラスの入れどころをどうしようかなっていうのをちょっと色々考えて。昔のパターンだど結構細かくやってるんで、もっとベタな感じでいいんじゃないかなと。もう間奏はコーラスだけみたいな。

—それがすごく良かったです。あのコーラスが入っていることによって、すごくかけ離れたイメージではないじゃないですか。もともとこの曲自体がそういうコーラスがメインになる曲だったってこともありますけど。それが「サ・ヨ・ウ・ナ・ラ」からの流れの中で、ちょっと違うけどやっぱり安心するっていう、歌詞カードの芝生のページのあの2つの曲がホッとする、みたいな。

そうだね。ホッとするコーナーだよね。

さわやかなイメージしかないよね、
この曲には。

—この歌詞は、ただただラブラブな歌なんですけど、そういうことを思いながら、イメー

Compositions '83-'92

全曲インタビュー ～前編～

ジしながら歌ってるんですか？

そうだね、やっぱり春の歌だからね、さわやかな。さわやかなイメージしかないよね、この曲には。

—でも、だからといって、「春」だって言ってないですよ、この曲の中では。私たちのイメージでは、春に発売されたから春の曲っていうイメージがあるんですけど、3/21に発売っていう印象がすごくあって。しかも歌詞の中で春っぽいフレーズは「グリーングラス」だけだし。

でも、秋ではないんだよね。やっぱり春なんだよね。さわやかな。



ユーチューブの撮影中！

—ホントに幸せ溢れる歌詞でしょ。こういう経験もあるのかなと（笑）

あはは（笑）そりゃあるよね。もうこの年になれば、大概のことは経験してるよね（笑）そういう気持ちも忘れてはいけないよねって（笑）

—ご自分の中で、こういう光景をイメージするってことはあるんですか？



オシャレなポスター！

この曲は結構イメージしやすいよね。すごく「そうだよね！」って共感する部分はみんなもあると思うし。

—具体的にマリリン・モンローの絵が出てきたりしますしね。

キスしたりね（笑）そういう気持ちも忘れてはいけないよねって（笑）

—「これでもう君のものさ」とか、言ったりしたことはないでしょうけど。

それはないけどね（笑）

—なんとなくこの歌詞は、芝生のイメージとマリリン・モンローの絵のイメージがすごくあって。

あと、今回のアレンジ的には、ドラムとベースの感じがホントにオーソドックスなんだけど、どっしりと落ち着いたところに収まった感じがあって、「そうだよ、この曲はドラムとベースはこうであるべきだったんだ」っていうのはちょっと思ったよね。とはいえドラムは全部打ち込みだけど（笑）でもベースを

生で弾くことによってそれでもそういう雰囲気が出るんだよね。

—あの生ベースがこの曲ですごく生きてる。当時のシンベはそこまでベースの印象がなくて、コーラスの印象の方が強いけど、今回に関しては流れる感じ、Bメロの「タララ〜ン」ってところが「うお、いいな！」って思いました（笑）

そうそうそう、王道だもんね。半音落ちのね。

—コーラスは大変だったでしょ？

いや、でもそんなにかぶせてないんだよね。一応三声かぶせて、三声で録ったやつをダブルさせるんだけど、全部何回も歌うんじゃないくて、それをまとめたやつにエフェクトをかけたやつと、生で三声のやつとを混ぜたみたいなの。ちょっとね、ヘンな混ぜ方をしたんで、自分でも覚えてないんだけど。その時の雰囲気やってるから（笑）結構思いつきでやってるんで、「あ、これいいな」と思ったらそのまま採用しちゃうから。あとでどうやったかあんまり覚えてないことが多い。ひとりでやってるからね。

—ひとりでここまでできちゃうのがさすがです。「やっぱり大土井裕二スゴい！」って、いろんな人たちに自慢したくなっちゃいますね！



PARIS MIKI アメリカ科店にマングラスに入る産数と金をチョイス！

Compositions '83-'92

全曲インタビュー 〜前編〜



長時間のインタビュー、ありがとうございました！
続きは次号をお楽しみに！



うしろ姿もカッコイイ！

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

今回は、前半5曲のインタビューをお届けしました。かなりのボリュームになってしまいましたが、ファンならぜひ訊いてみたいことばかりの内容でしたので、ほぼノーカットで掲載しております。チェッカーズ時代のオリジナル曲との比較や、今回のアレンジに関するユウジさんの思いなど、これからCDやライブでこの曲たちを聴くのがさらに楽しみになる内容でした。ぜひご感想などいただけると励みになります！後半5曲のインタビューは、次号に掲載の予定です。どうぞお楽しみに！

HELLO CLUB スペシャルイベント

大土井でキャンプでショー！2020 in モビリティパーク 開催決定！

2020年5月16日（土）～17日（日）
モビリティパーク（静岡県伊豆の国市）
※申込み開始：3月15日 20時



いつも応援ありがとうございます！

過去3回の開催は毎回大好評で、毎年の恒例行事となった「大土井でキャンプでショー！」ですが、今年も開催が決定しました！ここ数年、ソロキャンプも楽しんでいます、毎年の大人数でのキャンプも賑やかで、今からとても楽しみにしています。

「大土井でキャンプでショー！」では、キャンプ場オーナーのご厚意もあり、だだっ広いキャンプ場の中の一部を借り切って、大土井ファミリーで楽しく過ごせます。

キャンプ慣れた人には、テントを持参してもらって楽しんでもらってもいいし、キャンプ初心者にも安心な、山小屋風ログハウスも準備しています。ログハウス（Fケビン）の方は、手ぶらでも気軽に参加できるよう、寝袋なども全てご用意。

ミニライブはもちろんのこと、一緒に食事を作ったり、夜更けまで語り合ったり、ここでしか体験できない時間を共有しましょう。

キャンプが初めての方もそうでない方も、たくさんのご参加をお待ちしています！

よろしく！

大土井裕二

【詳細・お申し込み】

大土井でキャンプでショー！特設サイト
<https://www.odoipage.info/camp>

わかるわかるわかる〜!

大土井裕二が演奏する曲の、好きなベースのフレーズを教えてください!



私が好きな裕二さんのベースのフレーズは、
・「HEART IS GUN」のサビの、「心の中に眠って
る銃よ目ざめろ (デ〜デッデ〜 デッ デレレデッ!)
HEART IS GUN 〜」の↑ココの部分
・「80%」の「カメレオン Back skin の揃いのユニフォー
ム着てさ」の (デデデデデデデ デデデデデデデ)
と段々上がっていくところ
・あと、「WANDERER」と「ミセスマーメイド」のベー
スライン、最初から最後まで好き過ぎて「ここの部分!」
って抜粋できません (笑)
共感して頂けるでしょうか・・・?
他のファンの方の好きなフレーズもきっと「わかるわか
るわかる〜!」ってなると思うので楽しみです。
<ふみ (東京) さん>



引き続き、みなさんの「萌えポイント」、ピンポイント
な、マニアにしかわからない単語でのご応募、心より
お待ちしております! どしどしお寄せください!

編集室からのお知らせ

Opinions Wanted!!

★会報にこんなコーナーがあるとうれしい!

★裕二さんのこんなことを知りたい!

など、会報に関するご要望がありましたら、ぜひご意見
をお寄せください。

いただいたご意見はすべて、大土井裕二本人にも目を通
してもらいます。

たくさんのご意見をお待ちしております!

【重要】HELLO CLUB からのお願い

HELLO CLUB へのお問い合わせのメールに、「パスワ
ードを忘れてしまいました」と「メールアドレスを変更
したいです」というものが多く見受けられます。その中
には、お名前やご住所など、会員様を特定できる内容を
記載されていない方も多くいらっしゃいます。パスワー
ドの再発行や登録情報の変更につきましては、ご本人様
を確認できる情報が必要です。お問い合わせの際には、

・お名前・会員番号・ご登録のご住所・お電話番号

・メルアド変更の方は、新旧のアドレス

を必ずご記載の上メールをいただけますよう、よろしく
お願い致します。

編集後記

2020 年代に突入しました! 昨年はセルフカバーアル
バムのリリースという一大イベントの年ということも
あり、アルバムが皆様のお手元に届き、お聴きいただ
けているタイミングでインタビュー記事を読んでもら
いたいという思いから、会報誌の発行が年明けとなっ
てしまいました。お待たせしてしまった分、ご満足い
ただけるボリュームにしたい! と、スタッフ一同気合
を入れて編集作業に当たりました。「HELLO」と「8
392」は、楽曲の制作やアレンジ、録音方法におい
ても全く異なる方法やコンセプトで作られた対照的なア
ルバムです。この2枚のアルバムの制作秘話を読み比
べられるというのも、大土井裕二の「振幅」といった
ものを感じられる貴重なものになっていると思います。
アマチュア時代に作られた曲からソロデビュー後に作
られた曲まで、35 年以上の歳月を経てもなお、「今」
を生きている曲というのは、これからもずっと、私達
と共に歩み続けるのでしょうか。音楽は奥深い。人生
のパートナーのようなものですね。

編集スタッフ一同

おた
よりの



宛
先

大土井裕二オフィシャルファンクラブ「HELLO CLUB」
会報誌「Pallet」では、会報に関するご意見・ご感想を
募集しております。

ご意見・ご感想ならびに各コーナーへの応募につつま
しては、下記アドレスまでメールにてお送りください。
尚、イラストの投稿につきましては、手描きの場合、
現物をスマホやデジカメで撮影していただき、画像添付
にてご送付ください。

皆様からいただいたご意見やメッセージ等につきましては、
本誌に掲載させていただく場合がございますので、
あらかじめご了承ください。

お名前 (ニックネーム可)、おところ (都道府県のみで
OK) をぜひご明記ください。

会報誌「Pallet」宛メールアドレス

pallet@odoipage.info



白いキャンバスに少しずつ色がついてきた「HELLO CLUB」
これからも会員みなさんの色で自由に描いて
虹色のよろこびが世界中にあふれますように…



大土井裕二オフィシャルファンクラブ会報
Pallet vol.3

発行日
2020年2月3日
発行元

大土井裕二オフィシャルファンクラブ
HELLO CLUB